

下剤依存症から脱出するための 下剤減量プログラム【重症編】

心の問題を伴う重度の下剤依存症

最後に、最も重い下剤依存症の治療法について述べていきます。このタイプの人だと、1日に下剤を何十錠、あるいはそれ以上飲んでいるような人もいます。このタイプは私も、あの意味で現在でも手探りで治療を行っているところがあります。それは、心の問題がかかわってくるため、ひとくくりにして対応することが難しいからです。

重症の患者さんたちのタイプは2つに大別されます。ひとつは「おなかが張る、排便がうまくいかない」という理由から、苦しさのあまり、下剤の服用量がどんどん増加してしまったケースです。

この中には、「下腹部が張ると、みつともない」「おなかが出ているから、恥ずかしい」という意識をもっている人も含まれます。また、「排便がないと不安だ」という気持ちから、服用量がふえてしまったケースもあります。

根気強い治療で重症の人も必ず改善する

165



「下剤を手放せない」との強い思いを持つ重症の下剤依存症は、心の問題もかかわるため治療が非常に困難。しかし、根気強い治療で必ず光が見えてくる。

もうひとつは、いわゆる摂食障害（拒食症および過食症）を合併しているケースです。

摂食障害とは、主に拒食症と過食症の総称です。患者の極端な食事制限や過度な量の食事の摂取などを伴い、それによって患者の健康にさまざまな問題が引き起こされるという疾患なのです。

拒食症では極端な食事制限から、体重が極限までへって、月経が停止することがあります。

また、拒食症や過食症いずれの場合も、短時間に大量の食べ物を摂取し、指や手を口に入れて食べたものを全部吐いたり、食べた分をすべて排出しようとして下剤を乱用したりしてしまいうことも少なくありません。

その結果、カリウムなどの電解質（血液中の塩類）が失われて不整脈が起こったり、栄養失調による感染症や貧血、筋萎縮（筋肉が萎縮し、弱ってしまう状態）や骨粗しょう症（骨がスカスカになる病気）など、深刻な病気が引き起こされたりしてしまいます。また、こうした患者さんは抑うつ症状や自傷行為、アルコール乱用などの精神症状を伴うケースも多いのです。

摂食障害は若い女性に多く、軽い拒食症では特にダイエットがきっかけとなつて起こる例が多いといわれます。しかし、根本原因には親子間（特に母娘間）の問題も大きいといわれます。